

## 「2022年度タイ・チュラーロンコーン大学派遣参加報告書」

京都大学工学部2年 長谷川愛真

約二週間の滞在の中でもっと勉強すればよかった、帰国後は頑張ろうと何度思っただろうか。これはタイ語に限った話ではない。英語も、自分の専門分野の建築も、日本の文化も、様々な場面で自分の知識不足、経験不足を実感させられた。

チュラーロンコーン大学の学生とは基本英語で会話したので、中々英語が思い浮かばない自分を歯がゆく感じた。彼らは日本語専攻ではなかったが、日本語がとても上手なことに驚いた。私は第二外国語でドイツ語を学んだが、彼らの日本語とは比較にならないくらい語彙力も知識もない。もう少し真面目に勉強するべきだったなと反省した。残念ながら建築学部の学生には出会えなかったので1人で建築学部の校舎に行き、どのようにして学んでいるのか尋ねてみた。突然きた謎の外国人にも優しく接してくれ、作った模型や図面を見せてくれた。設計の大変さや模型製作の作業について語り合ううちに自分が普段設計をする際にあまり考えていなかった部分に気づくこともできた。関西の他の大学の建築学生とは話したことがあったが、海外の建築学生と話すのは初めてだったので貴重な経験になった。

タイ語に関してはほぼ初めて学ぶ言語だったので二週間で会話ができるようになったかと言うと、正直そうではない。しかし最終日前日に道に迷ってしまい、住宅街で途方にくれていたところ鶏を脇に抱えたおじさんが声をかけてくれた、その方は英語が話せなかったので駅、どこ、右左などのタイ語の単語でなんとか道を聞くことができた。海外に行くときはやはり現地の言葉を多少なりとも学ぶべきなのと思った。

今回の渡航前はなぜ大学や教授がそこまで留学を進めるのかわからなかった。インターネットが発達しており日本にいながらほとんどの論文を手に入れられる時代に、わざわざ海外で学ぶ意義があるのだろうか疑問を持っていた。しかし海外の学生と関わること、そして異国で生活するという事は代えがたい経験になるのだと納得した。バンコクでの生活は何もかもが目新しく、毎日が驚きに満ちていた。タイはまだまだ経済成長の途中にあり、新しい建築も続々と建設されている。一方で低所得者層の住宅はインフラが整っていない。この国には建築家ができること、建築家がやらなければならないことが多いように感じた。今までは留学を考えていなかったが（やりたいと思っている耐震の研究は日本が盛んなため）日本を出れば日本と違う建築の需要があることに気づき、留学も選択肢として考えようと思った。

最後にチュラーロンコーン大学の先生方そして学生のみなさんありがとうございました。